

Knowledge from water, knowledge from the nature.
The important things for our future.



ミズミライ MizuMirai

水の未来を育む。2023 セディア財団活動報告書 Vol.9



誰がどこにいても
問題を解決できる社会へ。

困らない社会へ。

公益財団法人セディア財団

さあ、
水について
一緒に
話し合い
しましょう。



これまで、そしてこれからも、
セディア財団は持続可能な未来への取り組みを応援していきます。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



公益財団法人 セディア財団

〒100-0004
東京都千代田区大手町1-3-2 経団連会館12F
Tel.03-6478-1341 Fax.050-3535-9408
<https://www.sedia-found.org>

誰がどこにいても問題を解決できる社会へ。
何ができるかを考えて、一歩を踏み出す人や企業がある。

困らない社会へ。

Aiming for a society where there are no problems.

きっかけは、ささいなことかもしれません。
しかし世の中の困ったことに気づいて、その改善に取り組む。
未来への進歩とはそんな小さな積み重ねに他なりません。

セディア財団が見つめつづけている水や食———。
世界的視野にたてば、十分なところと不十分なところがあって、
足りないところがあれば余っているところもあります。
均衡を失ったところには安全や安心は生まれません。
だからこそ個人的な経験をきっかけにその困りごとに気づいて、
解決へ向けた人や企業にセディア財団は拍手とエールを贈りたいと思います。

そこで今回の「MizuMirai」は水問題を構造からとらえて解決に挑む企業と
三方良しの仕組みを築いてフードロスの軽減に挑む企業取材しました。
困らない社会へ。誰もの願いへ一歩踏み出した人たちの想いと行動を
ぜひ、ご覧ください。



水問題を構造からとらえ、 解決に挑む。

画期的なアプローチでこれらのニーズに応える製品を開発して大きな注目を集めている企業がある。WOT A株式会社だ。WOT Aの何に、どのような考えに、日本のみならず世界が賛同の手をあげているのか？その取り組み、めざす未来を取材した。



マサイ族の集落ではソーラーシステムで電気を発電し、電波も飛んでいる。冷えたジュースを飲みながらスマートフォンで動画を楽しむことができる。しかし土木建設業的なアプローチを必要とする水のインフラは整備に至っていない。前田さんはこの光景を見て、製造業的アプローチで水の課題に取り組むことで、水問題解決を加速できると確信した。

Water

マサイ族の暮らしを視察して、彼らの環境まで届くソリューションを考えた。

高校時代から水処理の研究に取り組む、東大で建築設備や都市インフラを学んでいた前田瑤介さんは、大学時代にWOT Aに参画しました。「水問題を構造からとらえ、解決に挑む」を標語に、生活排水の再生循環利用を可能にする「小規模分散型水循環システム」、及びそれを実現する「水処理自律制御システム」の開発によって、水問題の根本的解決をめざしました。その方向が間違っていないことを確信したのがマサイ族の集落を視察したとき。前田さんはこう言います。「マサイ族の集落にも工業的な製品はあるんです。車はトヨタのランドクルーザーだし、ソーラーシステムで発電をして、冷蔵庫もあれば通信機器もある。冷えたコーラを飲みながらスマートフォンで動画を楽しん

でいるんです。しかし水だけは毎日何キロも先まで汲みに行っているんですね。上下水道が整備されていないのです。製造業でできたものは世界の果てまで届くけれど、土木建設で築くものは届いていないと目の当たりにしました。エアコンの室外機や、給湯器のように、住宅設備の一つとしてその家一軒で行える水インフラ製品を作るという想いは間違いではないと確信しました。」

環境に目覚めたのは
中学の頃から。

まずは水の課題に特化する。

徳島県の「自然」と「インターネット」しかない環境で育った前田さん。幼い頃から生物学や、哲学に関心を持っていました。そしてアル・ゴア元米副大統領の環境問題に関する講演を聞き、環境問題に目覚めたと言います。「アル・ゴア氏が『環境問題に取り組むと人類全体と仕事ができる。そして環境問題の解決を通じて世界中の人とつながることができる』とおっしゃっていました。世界には生物がいて、その生物が無数に集まった結果、大きな生態系ができています。しかしゴアさんは人間の環境だけが循環していないと言います。この解決こそが未来への課題であると学びました。水に特化しようと思ったきっかけは東日本大震災です。その前日が大学の合格発表の日で私は東京にいました。大震災でインフラが止まったとき、私たち



命の源である水だからこそ、課題の解決が次なる課題を生み出すことになる。

は何もできない、インフラについて何もわかっていないと思われ、知らされました。水が3日間使えないと命に関わり、それらのバックアップが考えられていないのは問題なのではないかと。その問題が如実に現れたのが東北の避難所です。十分に生活用水が使用できず、衛生環境などの悪化によって命を落とす方もいらっしゃいました。日本の水インフラには大きな問題があると思いい、水について調べるようになりました。

土木から工業製品へ。「スマール」をキーに水インフラの革新へ。

自動車やスマートフォンのように水のインフラも世界中に届くものにならないか?そのアイデアが家電のような小さな製品になった。その製品は被災地などで大きな活躍を見た。前田さんに、水問題に取り組む理由を聞いた。「水問題は全人類の課題であり、緊急性も高い中で、未だに抜本的なソリューションが生まれていないから」と前田さんは答えてくれた。

土木・建設業的アプローチから製造業的アプローチへ。前田さんが課題解決のために導きだした考えに「小規模分散化」というキーワードがあります。水インフラは巨大だという概念を覆して、小さくすることで課題を解決するという考えです。前田さんは言います。「徳島の田舎で暮らしていたときは、湧き水からホースで水を引いて使っていました。実際にスマールで、シンプルでした。問題が起こればどこに原因があるかすぐにわかります。しかし現在の水インフラは大規模なシステムを前提としており動きがとりにくい部分があります。電車路線のようにどこかで事故が起これば複数の路線に影響が出てしまう感じと近いかもしれません。また、巨大なシステムを前提としているが故に整備・更新に

は莫大な費用がかかります。たとえばスラム街で水に困っている人が上下水道を整えようとしても、巨額のお金を捻出することはできません。しかしバイクを買えるような価格の小さな水インフラ製品があれば、それを使う人は多くいるはずです。そして開発に着手したのが「WOTA BOX」。プロトタイプ段階から被災地へ届けて支援活動を続け、同時に利用データの収集や実証試験も行って、2019年に製品化しました。幅も高さも1メートルに満たないスマールな製品ですが、水を生活用水にする処理と排水処理とを一通りで行えます。既存の水道から断絶した場所でも使える、いわば『持ち運べる水処理施設』、同時にそれは『水インフラの家電化』の第一歩でした。

そして「水インフラの家電化」へ。災害時の水問題解決はそのためのアプローチ。

前田さんがめざしているのは、住まいごとに排水を処理して再び利用できる「水インフラの家電化」。「WOTA BOX」を開発して、被災地で役立つアプローチを取ったのはそのためだったと言います。「家の水は暮らしに関わることなので、実績が少ないベンチャー企業にはまかせてはいただけません。それは私も十分に理解できます。だから実績を最速で作る必要がありました。災害時の避難所に試作機を持ち込む

WOTA Products

被災地から都市へ。日本から世界へ。

WOTA独自の水処理から生まれる製品たちは使用される領域を大きく広げ、

国境も越えて、いろいろなところで活躍しています。



2人分と同じ量の水で約100人の人がシャワーを浴びることができる。

WOTA BOX

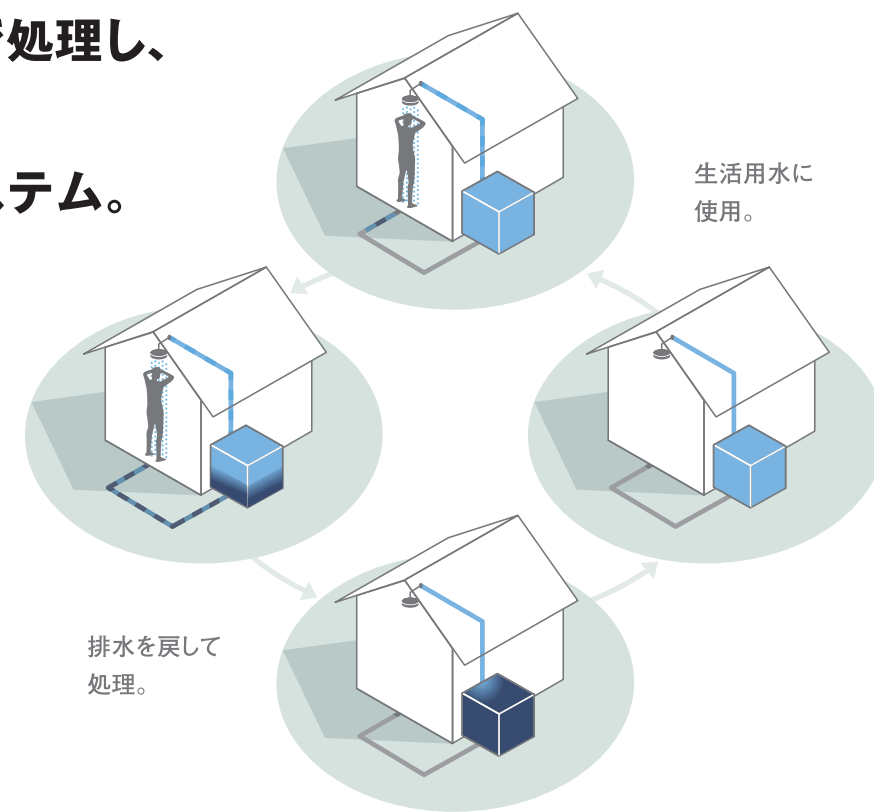
災害に見舞われた被災地や避難所で大活躍しているのが「WOTA BOX」。水処理場を10万分の1のサイズにして、持ち運べるようにした装置です。水の再生率は98%以上。シャワーに利用する水は通常1人当たり約50リットルと言われていたが、「WOTA BOX」で水を再利用すれば、同じ量の水で約100人がシャワーを浴びることができる計算になります。



Small Is Great! And Full Of Possibility!

使った水をその場で処理し、 使える水にする 小さな再生循環システム。

世界が抱える水問題へ立ち向かうために、WOTAが着目したのは「水の再生循環利用」。上下水道は「自然の水源から水を汲み上げ、生活排水は浄化して川や海に流す」という、いわば「使い捨て」の水利用モデルを脱却。WOTAは「排水を最も身近な水源ととらえ、その場で生活用水に再生して何度も使う」という循環型の水利用モデルの実現に取り組んでいます。センサーとデータを駆使した水処理の自律制御を核とする独自技術で、これまでは不可能だった「住宅単位での水の再生循環利用」を実現する革新的な住宅設備。それを設置した集落が近々誕生予定です。



水再生循環技術を使った「公衆手洗い」の新しいスタンダード。

WOSH

新型コロナウイルスによる感染症の脅威がある中で、WOTAは水再生循環技術を使って「公衆手洗い」と呼べるような手洗いの新しいスタンダードを作りました。それがポータブル手洗いスタンド「WOSH」です。20リットルの水と電源があれば、どこでも設置可能。繰り返し手を洗うことができる装置です。手洗いだけでなく、スマートフォンも綺麗にできる除菌機能付き。安心をもっと心地良くする、今までにない手洗い器です。



WOTA CEO
前田 瑠

徳島県出身。東京大学工学部建築学科卒業、同大学院工学系研究科建築学専攻（修士課程）修了。小学生の頃から生物学研究を開始し、中学生で水問題に関心を持ったことをきっかけに、高校時代に水処理の研究を実施。大学では都市インフラや途上国スラムの生活環境を、大学院では住宅設備（給排水衛生設備）を研究。ほか、デジタルアートなどのセンサー開発・制御開発に従事。WOTA CEOとして、水問題の構造的解決をめざす。

態にするまでもっていききたい。そのためには喜んでノウハウをオープンにしていきたい。水でそれが可能になれば次の環境課題に移っていくことができます。WEFAMが循環すれば人類は22世紀へ進むことができます。水は大きなインフラという概念を覆し、小さくすることで水問題をブレイクスルーするWOTAの想いと行動。世界が賞賛の手をあげるのにはその純度にあることがわかります。どこまでも純粋に、深く、確実に水問題の解決へ挑んでいく。セディア財団もそんなWOTAの取り組みを応援しています。

めざすのは
ノウハウをオープンに。
水問題が自律的に
解決していく状態へ。

被災地から住まいへ。前田さんはさらにその先をめざしています。それは水問題が自律的に解決する環境を生み出すことです。水問題は世界の問題、人類の問題です。解決したい人はたくさんいるはず。方法さえシェアすれば多くの方が賛同してくださると信じています。私たちは仕組みやシステムをオープンにしていきたいのです。会社としての業績目標もありますが、そういう目先のことに囚われず、水問題が自律的に、つまり勝手に解決していく状態へ。

で、使っていたら、喜んでいただく。そんな事例を重ねると自治体の皆さまから、そろそろ災害だけじゃなくて、過疎地域や島しょ地域など、水問題を抱えているところが多くあるのでは、日常の給水と排水処理もやりませんか？とお話をいただけるようになったのです。その日のために私たちは何年も前から開発を進めていました。来年には集落単位の規模においてWOTAの水循環システムを活用したモデル地区が誕生予定です。各住戸にWOTAの製品を設置して、一軒一軒でその住戸の水を循環させる。まさに小さな水インフラのモデルとなる場所です」と前田さんは教えてくれました。

嘆くだけで終わらせない。 ロスをゼロへ、そしてプラスへ変える 取り組みをする企業がある。

年間523万トンのフードロスがあるとされている日本。
食品製造業や食品卸売業などのフードロスをターゲットとしたビジネスを展開し、
その利益を社会貢献活動に活かしている企業がある。株式会社クラダシだ。
1.5次流通を拓き、三方良しの展開をめざすクラダシの取り組みを追った。



株式会社クラダシの代表取締役社長 関藤竜也さんは
商社マン時代にフードロスの現状を知り、大きな社会課題
である現実を放っておけないという使命感を原動力に
クラダシを立ち上げました。みんなトクするソーシャルグッド
マーケット「Kuradashi」を通じて、フードロスの削減
や、誰もが気軽に社会貢献に参加できる仕組みを育て
ていけるよう取り組んでいます。最近ではウクライナ政
府からの要請を受けて、紛争から非難している人々への
食料支援活動も展開しています。



Food Loss

小さな島国の日本、
実はフードロス大国でもある。

食の豊かさはどこにあるのでしょうか？
豊かさとは量のことなのでしょうか？
フードロスの現状を知ると考えざるを得ません。フードロスとは「本来食べることができなのに廃棄される食品」のこと。形が崩れたり、規格外の加工食品、賞味期限切れ加工食品、家庭・飲食店での食べ残しなどが挙げられます。
2023年発表の農林水産省の資料によると、日本の事業活動で廃棄されたフードロスは279万トン、家庭から廃棄されるフードロスは244万トン、あわせて523万トン。これは世界全体が援助している食料の量の、実に約2倍に相当すると言われています。
しかし嘆いているだけでは問題は解決されません。「もったいない」の精神で、たとえ今は小さな一歩であっても、続けることで大きなムーブメントに成長させよう

と意欲的な取り組みをしている企業があります。

株式会社クラダシは、
三方良しのスキームを実現。

お得な買い物でフードロス削減に取り組む株式会社クラダシもそんな一社。代表取締役社長の関藤竜也さんは阪神淡路大震災を経験。バックバックに水と救援物資を詰め震源地にて救助活動に取り組むも、一人の力では到底行き届かない支援に対して自身の無力さを痛感したと言います。さらに商社マン時代に中国で食品の大量生産・大量廃棄の現状を目の当たりにして大きなショックを受けました。この現実を見て見ぬふりをすれば世界の未来は大変なことになる。社会課題の解決に取り組みたい。そんな使命感に目覚めました。しかし社会風潮と社会行動の変革には一人の力だけでは足りないことを震災で思い知らされたため、「MDGs」(のちのSDGsに進展)に照準をあわせて、サーキュラーエコノミーとフードロス削減をめざし、ソーシャルグッドマーケット「Kuradashi」を生み出したのです。

クラダシがめざしたのは、フードロスを削減して社会に貢献すること。具体的には「もったいないを価値へ」をモットーに、賞味期限の切迫や季節商品などの要因で、まだ食べることができるのに通常の流通ルートでの販売が困難な食品など

フードロス削減へ取り組む企業さま

三方良しのソーシャルグッドなスタイルを提唱。



楽しいお買い物で、みんなトクするソーシャルグッドマーケットが「Kuradashi」。あっと驚くお得なお買物がフードロス削減につながるだけでなく、売上げの一部を社会貢献活動へ寄付。そのソーシャルグッドなスタイルが支持されて利用者数もグングン伸びています。

Kuradashi 株式会社クラダシ
Social Good Market <https://corp.kuradashi.jp>



フラワーロスに取り組み、花農家と消費者の架け橋となる。



生花店や式場などで美しい間に捨てられてしまうフラワーロスの解消に取り組む活動を展開。花農家と消費者の架け橋となるオンラインショップの開設やロスフラワー®のストーリーをブランディング化し、花の持つ美しさ、価値の再定義や、新たな可能性を伝える活動などを行っています。

RIN 株式会社RIN
LOSS FLOWER <https://lossflower.com>



もったいないを基本に、新しい消費のあり方を提唱。



ロスゼロは、食品加工メーカーに特化して、規格外品や製造余剰品を生活者につなげるプラットフォーム「ロスゼロ」を運営。もったいないものの価値を見出すことで、日本に新しい消費のあり方を提案する他、フードロスの削減を社会に啓発する活動を積極的に行っています。

LOSSZERO 株式会社ロスゼロ
<https://losszero.co.jp>



事業者と消費者をつないでフードロスの削減に貢献。



コークッキングは、事業者側と消費者をつないでフードロスを削減するフードシェアアプリ「TABETE」を運営するなど、食を切り口に「生産と消費の持続可能性」など、さまざまな考えるきっかけを提供。誰もが「人間らしく創造的な暮らし」を実現できる社会の実現に貢献しています。

CoCooking 株式会社コークッキング
<https://www.cocooking.co.jp>



日本では年間523万トンのフードロスが発生。それは世界の食糧援助量420万トンの1.2倍にもなります。また、農林水産省の資料によると、日本は、人口1人当たりの食品廃棄物発生量が世界で第6位、アジアではワースト1位。その一方で、日本の子どもの7人に1人が貧困状態であり、農林水産省の調べによると日本の食料自給率は年々下がり2020年には37%に。クラダシを始め、さまざまな人や企業がこの現状に危機感を覚え、さまざまなカタチでフードロス削減への行動をスタート。多くの消費者に賛同を得ています。

食品のロスは、人と未来の可能性も削減していることに気づいて欲しい。

をクラダシが買い取り、フードロス削減のECサイトである、「ソーシャルグッドマーケット」Kuradashiで販売することで、フードロスを削減すること。その売上げの一部を社会貢献活動団体への支援に充てることで、環境保護や動物保護団体にも貢献することです。創業当初はまったく見向きもされず、苦難の連続だったと言います。しかし「一つひとつ丹念に取り組むことで、クラダシは「三方良しのスキーム」を作り上げていきました。一方は生産者や食品メーカー。フードロスや廃棄コストを削減できます。もう一方はお客さま。お得に買い物しながら気軽にフードロスの削減に貢献できます。また、売上げの一部が寄付されることで社会貢献につながり、誰も損をしない。まさに三方良しのスキームを実現しているのです。

そして1.5次流通という新たなマーケットを開拓。

さらに見逃せないのが、クラダシは1.5次流通という新たなマーケットを開拓してきたこと。1.5次流通とは、1次流通（企業からユーザーへの販売）と2次流通（オークションやフリーマーケットビジネスなど中古品の売買）の間に存在する、「新品だけど廃棄される商品」の売買のことを言います。時代の風潮も変わり、MDGsからSDGsという国際社会共通の目標が定められ、消費者の意識も大きく動きました。賞味期限が

近いとはいえ、最大97%引きという値段設定、また、売上げの一部が社会貢献活動団体へ寄付されるというクラダシのサービスは多くのファンを獲得。現在の会員数は30万人を超えるまでになりました。そして現在のクラダシは社会貢献をしたという人が集まる場へと成長しています。さらにクラダシの理念やスタイルに共鳴する企業や自治体も登場。2019年に食品ロス削減推進法が施行され、フードロスの削減に関する自治体の責任が法律に明記されました。この流れを受け、クラダシは、大阪府や横浜市など、全国の自治体と連携協定を締結し、官民一体となった取り組みも加速しているのです。大きな視座を持ちながらも、あくまで地に足のついたところからスモールステップで会社を成長させてきたクラダシ。その理想が実現する社会が来るまで足を止めることはないでしょう。いや、地球の未来がクラダシのさらなる躍進を望んでいる限り、クラダシの前進は止まることはないと思います。



「わたしたちのくらしと水」 かべ新聞コンテスト2022

くらしと水の関係について、そして水の未来について考えることは、私たちの未来について考えることです。だからこそ未来を担う子どもたちに考える場を提供したいとの想いからスタートした「セディア財団全国小学生「わたしたちのくらしと水」かべ新聞コンテスト」を重なる今年で8回目。全国の小学校178校から、昨年を上回る5,991作品もの力作が寄せられました。今回も新型コロナウイルス感染症の影響でいろいろな制約があるにも関わらず、応募数は過去2番目の多さ。その内容も一人ひとりが身近な水を真摯に見つめ、心を動かす興味や関心について探求したものが多く、質の面でもレベルアップを感じる回となりました。

入賞作品発表!

全国の小学校 178 校から
5,991 もの作品のご応募、
ありがとうございました。

おめでとう
おめでとうございます。

最優秀賞は、
京都府京都市立竹の里小学校
4年生の橋本菜七さん。 ※現在5年生



水を通して世界との
つながりを考えることは、
自分たちの未来を考えることです。

選定に関しては、まず、2022年11月24日に一次審査を行い、最終ノミネートとして40作品、及び努力賞候補の選定を行いました。そして2022年12月16日に日本経済新聞社東京本社において最終審査を行い、田村学審査委員長、渡邊元セディア財団理事長など7名の委員が厳正に審査した結果、最優秀賞1作品、セディア財団特別賞1作品、優秀賞5作品、準優秀賞9作品、佳作21作品、努力賞64作品、そして学校優秀賞1校、学校賞5校を決定しました。入賞作品に関しては「入賞作品集」で紹介しています。ぜひ、ご覧ください。

今回、最優秀賞に輝いたのは、京都市京都市立竹の里小学校4年生（現在5年生）の橋本菜七さん。社会科の授業で「くらしと水」について学んだことと当時の水不足問題がきっかけとなって、かけがえのない水について深く考えようとしたのがきっかけ。資料を活用し、施設に見学へ出かけ、実験も試みるなど、入念な研究の成果を存分に、楽しくまとめあげ、筆者の主張も明確に立ち上がる問題解決型の紙面になっている点が高評価につながりました。

セディア財団では第9回となる「セディア財団全国小学生「わたしたちのくらしと水」かべ新聞コンテスト」の開催を決定。詳しくは、セディア財団のホームページをご覧ください。



審査委員長総評

今回、特徴的だったのは、調べて、まとめた、新聞にするというだけでなく、そこから新たな疑問や課題が生まれ、また、新しい調査活動や追求活動に取り組む作品が多かったことです。こうしたプロセスを繰り返していく中で、物事の本質に迫っていくことができるようになるはず。これからのコンテストもますます楽しみになってきます。

國學院大學人間開発学部
初等教育学科教授 田村 学



第8回 セディア財団全国小学生「わたしたちのくらしと水」かべ新聞コンテスト2022

作品集をご覧ください。

小学生が大切な水について調べてまとめたかべ新聞の入賞作品が、今回も1冊の冊子にまとめられました。5,991作品の中から最優秀賞をはじめ、上位入賞作品を掲載。どれも力作揃いです。ぜひ、子どもたちの水への想いをご覧ください。

●セディア財団のホームページよりご覧ください。 <https://www.sedia-found.org>





今回、見事セディア財団賞最優秀賞に輝いたのは、岩手県立盛岡農業高等学校2年生の三上健洋さん。「山間農業地域の生産性の向上を目指して」とコンテストの魅力をテーマに、コンポストバインダーを活用して、生産性の高い農業をめざす取り組みと山間農業地域の課題解決を視野にいれたアプローチが評価された受賞となりました。また、金賞には兵庫県立農業高等学校3年生の井筒愛梨さん、「ロストテクノロジーをネクストテクノロジーに」、栃木県立宇都宮白楊高等学校3年生の青柳達也さんの「マイナー野菜から日本の農業を元気に」干瓢から広げる循環型農業、「そして東京都立農業高等学校2年生の木下侑さんの「スマート農業を目指す」江戸東京野菜「川口エンドウ」の進化」が選ばれました。

セディア財団賞(最優秀賞・金賞)を受賞された4名には、副賞として、2023年8月29日(火)・30日(水)の2日間、最先端農業を学ぶ「東京研修旅行」へ参加していただきました。



セディア財団賞最優秀賞に輝いたのは、岩手県立盛岡農業高等学校2年生の三上健洋さん。



左から、岩手県立盛岡農業高等学校 三上健洋さん、栃木県立宇都宮白楊高等学校 青柳達也さん、兵庫県立農業高等学校 井筒愛梨さん、東京都立農業高等学校 木下侑さん、岩手県立盛岡農業高等学校 佐々木幸教諭



第7回 高校生が描く「明日の農業コンテスト」でセディア財団賞(最優秀賞・金賞)を受賞された4名には2023年8月29日(火)・30日(水)の2日間、最先端農業を学ぶ「東京研修旅行」に参加していただきました。メインは東京大学で開催されたAHC 2023(第4回 アジア園芸学会議)のランチセミナーの参加。この会議は4年ごとに開催され、園芸に関連する研究者、企業、生産者が一堂に会するアジア最大の国際会議。高知性にとっては、世界の農業の最先端に触れる1日。目を輝かせて少しでも学び取ろうとする姿が印象的でした。

また、渡辺パイプ株式会社グリーン事業部のブースも見学! さらに浅草寺や東京スカイツリー、隅田川のクルーズなど、参加者全員で東京観光を楽しみ、大いなる学びと思いが残る旅になりました。

セディア財団賞受賞者への副賞は、農業の最先端に触れる旅。



第8回 高校生が描く明日の農業コンテスト 作品大募集! 応募締切り 2024年4月12日(金)

わたしたちが暮らす上で欠かすことのできない農業は、どうすれば持続可能で、生産的な産業になるのか。全国の農業や農業関連産業について学ぶ高校生の皆さんの日々の学びの中から、「自分ならこうする!」と考えた農業に関するあらゆるアイデアをまとめたレポートを募集しています。

詳しくは、セディア財団のホームページをご覧ください。 <https://www.sedia-found.org>



公益財団法人セディア財団主催
第7回 高校生が描く
明日の農業コンテスト
明日の農業を考えよう!

過去最多となる
794作品のご応募、
ありがとうございました。

入賞作品が決定!



8月28日、渡辺パイプ株式会社 両国オフィスでセディア財団からセディア財団賞最優秀賞の賞状とトロフィーを授与される三上健洋さん。

過去最高の応募数から選ばれた力作たち。高校生の明日の農業への想いがたつぷり詰まっています。

これからの農業はどうあるべきなのか? 若い人たちの注目を集め、夢を持って続けていける生産的な産業にするにはどうすればいいの? 農業を学ぶ全国の高校生がその未来を真剣に考えていると実感させてくれる「高校生が描く『明日の農業コンテスト』」。今回も「わたしはこんな方法で農業を元気にする」をテーマにした794作品が全国から寄せられました。

今回は6月1日に一次審査を、そして6月29日に最終審査を行い、セディア財団賞4作品(最優秀賞1作品・金賞3作品)、銀賞5作品、銅賞11作品、学校奨励賞2校を選定いたしました。



セディア財団活動報告
SEEDIA FOUNDATION ACTIVITY
REPORT

水から学んだこと。
自然から学んだこと。
その気づきと学びを
かけがえのない未来へ。

さあ、 水について 一緒に話し合 みましょう。

自然の学びをよりよい未来へ。

水はすべての始まりです。生命も自然も文明も、水から生まれ、水とともに発展してきました。水を知ること、水について考えることは、私たちの未来を知ること、未来を考えることだと思います。

セディア財団は、水の大切さについて、そして自然について、感じたり、学んだりする場を提供。その学びがよりよい未来づくりへのきっかけとなることをめざしています。どんな大きな進歩も元気で快適な未来への貢献も、すべては小さな気づきから始まります。この活動報告書をご覧になって、皆さんの心に気づきの灯りがともったら、こんなにうれしいことはありません。よりよい未来について、さあ、一緒に話し合みましょう。